

山東京山と万屋和助

——『歴世女装考』刊行に関わる謎——

一 『歴世女装考』刊行に関わる謎

江戸深川の木場で質商の次男として生まれた山東京山（一七六九—一八五八）は、著名な戯作者京伝を兄に持ち、彼自身も長く戯作の世界で活躍を続けた。江戸戯作界における重要な作者の一人である。

さて、京山は、『歴世女装考』前編（四巻四冊）という考証随筆も編纂している。同書は、弘化四年（一八四七）に成り、女装に関する起源・種類・名称の由来・変遷を、遺品・文献・古画に基づきながら考証する。現在、翻刻が日本随筆大成等に収録されているので、容易に読むことができる。当時の女性の風俗・慣習等を知る上では、必読文献といえる。

実は、『歴世女装考』刊行に関わっては、いくつもの謎がある。

神谷勝広

具体的に示せば、まず、

1 京山著作の広告において、繰り返し近刻とされながらも、なかなか出版されなかった。

京山は、弘化四年から二十八年前の文政二年（一八一九）に、狂歌師の鹿津部真顔に賛を依頼されたことを契機として、女性の装いに関する考証を開始するものの、三度の火災に遭い、収集した資料の多くを失う。刊行の遅延にこの被災が影響しているという推測は可能だが、それ以外の理由は検討されてこなかった。

2 菅原裕之の序と京山の附言が弘化四年のもので、巻末にも「弘化四年丁仲秋」となっているが、現在、諸本の中に同年刊と確定できるものが見出せない。

弘化四年刊の京山『教草女房形気』にも、口上として「京山作にて歴世女装考と申す美濃紙本、四冊出版仕候。……女中はことさら読

み見給ふべき本也。右いづれの本屋にもあり」とあるが、安政二年（一八五五）版よりも先行する版の存在が確認できない。

3 後編の予定があったことは、前編に見える記述からうかがえるものの、刊行された形跡がない。

なぜ後編が刊行をみなかったのか、この経緯もわからない。そして、最も気になるのは、安政二年刊の京山『琴声美人録』十二編中の序文によれば、京山の友人の言葉として、「かねてき、たる、女装考は某の翁がちからをそへて梓行にか、りしとき、ぬ」とあるが、

4 「某の翁」が誰だったのか。

これまた不明のままである。

つまり、京山が、長い時間をかけて編集・刊行した『歴世女装考』は、いくつもの謎を含んだ書なのである。今回、「某の翁」をまず特定し、その結果を踏まえ『歴世女装考』に絡む謎を解き明かしながら、同書に関する認識を深め、かつ当時における出版状況についても考えてみたい。

二 京山書簡三通

ここで、明治期刊行の『手紙雑誌』に注目する。『手紙雑誌』は、明治三十七年（一九〇四）三月創刊、同四十三年十月終刊、全九巻六十五号、全頁数四千強、当時および江戸時代の書簡とそれらの書

山東京山と万屋和助

簡に関連する論考を多数収録している。

しかし、国立国会図書館・大阪府立図書館等にも全冊が揃っておらず、昭和六十二年に、ゆまに書房から、『名家書簡資料集』全十巻として改めて出版されるが、「本書は、『手紙雑誌』（明治三十七年）同四十三年、有楽社、後に手紙雑誌社より、書簡及び書に関する資料を抄出し編集したもの」なのである。したがって、収録されていない部分がある。

幸い、愛知県西尾市岩瀬文庫に全冊揃った状態で所蔵されている。よって、今回は岩瀬文庫所蔵本を用いることとした。

『手紙雑誌』第二巻第一号に、次のような京山書簡を写真付で翻刻し掲載する。

尊墨奉拝見候。愈々御光賀被為在奉寿候。陳ば拙作蛛の糸巻、先日松平周防守様御聞伝へ被遊候とて、千葉葛野と申す歌よみ（周防候より御出入私学友）を以、被仰越候間、入御覧しも、はや御下りにも相成候やと葛野へ（銀座四丁目也）取に遣し候処、御定りに相成候との御事ゆゑ、いまだ返り不申候様申越候。御返しに相成候やう御さいそくの上、下り次第、もたせさし上可申候。兼て御約束の女装考草稿本は、鍋島様より帰り居候へども、不遠板本の初穂を入御覧申候ま、蛛の糸巻名代にもと存候へ共、さし上不申候。女装考追々板本の校合見せに参り申

候。其度々には深川の方をふしをがみ申候。此事いづはりに候はゞ八幡宮御ばつ蒙るべし。あなかしこ。謹言。

三月二十五日

この書簡の記述、特に「女装考追々板本の校合見せに参り申候。其度々には深川の方をふしをがみ申候。此事いづはりに候はゞ八幡宮御ばつ蒙るべし」は重要である。『歴世女装考』の支援者が、深川にいたこと、そしてその人物に対して京山は非常に感謝の念を抱いていたことがわかる。

そして、右の書簡については、次のような解説も加えていた。

……今この書によりて察するに、その著「女装考」を出すに当りて、深川木場万和翁の尽力を受けしかば、京山之れを徳として「深川の方をふしをがむ」までに有難かりしものと見えたり。

……

すなわち、『歴世女装考』の謎の支援者を「深川木場万和翁」と説明しているのである。しかし残念ながら、その根拠が提示されていない。よって、この段階では、その指摘の正否が確定できない。

では、「深川木場万和翁」とは、誰なのか。かつて、森鷗外『寿阿弥の手紙』（岩波書店『鷗外歴史文学集第四巻』、二〇〇一年刊）を読んだ折に「万和」の名を見たことを思い出し、改めて確認したところ、「万和」に関する記述が見出せた。

今の老人の細君は木場の万和の女です。里親の万屋和助なんぞも、維新前の金持の番附には幕の内に這入つてゐました。

「万和」は、「万屋和助」を略した言い方と判明する。

『手紙雑誌』には、先にあげた書簡に続けて、次のような書簡も掲載する。

愈以筆硯万福奉祥賀候。過日者木場翁の御恩恵之程、先生迄御礼申上度、且亦御風聴かたゞ参上いたし、ゆる／＼拝晤難有奉存候。其節御語らひ申上候青目一籠もたせさし上申候。何卒御一筆添へられ、此者へ被仰付、老君へ奉り度候。御精進日のをぞき候ゆゑ、延引におよび候。千ひろの海の深き御恵を、ありがたく奉存候。心の底を磯物の蜆貝、一とすくひに御くみわけ奉希候、謹言。

卯月十五日 当賀

京山

交山先生

尚々翁君より被命候画帖三枚御届可被下候。尊堂諸君へよろしく奉願候。輕少ながら一種先生へ呈し候。御笑留可被下候。万々奉期拝顔候。

宛先の交山は、画家の松本交山（一七八四～一八六六）である。交山は、もともと深川八幡境内の茶屋松本の主人であったが、店は弟

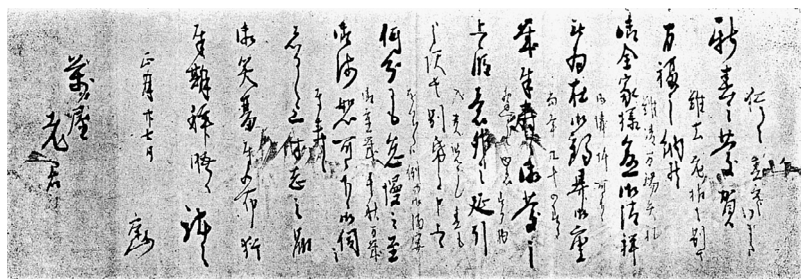


図1 萬屋老君宛京山書簡（西尾市岩瀬文庫所蔵『手紙雑誌』から転載）

に譲り、谷文晁の門人になり、酒井抱一とも交流を持つ。交山

は京山とも親しく、京山の著作

に、交山の名が度々見える。右

の書簡文中に「木場翁の御恩

恵」とある。これも『歴世女装

考』への援助を指すと推測する

ことはできるだろう。また、

『集古』（昭和五年一月号）「松

本交山の図様（三）」にも、

……其頃木場に屈指の材木

商があつて、その先代交山

の彩毫を愛賞した因みに寄

り、代がかはりても同じ交

山蟲屑……

と記述されている。また右の書

簡で「翁君より被命候画帖三枚

御届可被下候」といった部分と

もよく対応する。

したがって、この段階で『歴

世女装考』の支援者は、深川の中でも木場丁にいたことが確実にな

り、その土地柄からいって、その商売は材木商と推測される。

しかし、「万屋」かは、まだわからない。さらに検証を進める。

『手紙雑誌』第六巻第一号掲載の書簡（図1）、

新春之慶賀万福申納候。御全家様愈御清祥無為在御鶴昇御重歳

奉寿候。御慶申上候段、意外之延引申訳無、別紙に申上候。何

分にも怠慢之至、御海恕可被下候。御伺之しるし迄、休意之段、

御笑易奉希、猶奉期拝晤候。謹言。

正月廿七日

万屋老君

猶々春寒いまだ難去、老枯は別て難凌万端失礼御儀許可被下候。

当年九十の春に逢申候ゆゑ、すり物入貴覧申候。春もをりく

は例の御酒宴、御重歳、千秋万歳奉寿候。

右の書簡は、京山が「九十」の年つまり安政五年（一八五八）のも

のと確定でき、かつ宛先が「万屋老君」とあり「万屋」と京山の繋

がりを明確に示す。

以上から、先にあげた『手紙雑誌』の指摘——『歴世女装考』の支

援者は万屋和助である——は、正しいと認めることができる。

では、改めて万屋和助に関連する情報を年代順に三点示す。



図2 弘化三年刊『新板大江戸持○長者鑑』（東都正源堂板、東京都立中央図書館特別文庫室蔵）

まず、釈敬順『十方庵遊歴雜記』（『江戸叢書』巻の七（江戸叢書刊行会、一九六四年刊）収録）第五編下三十三「久永町天満の花王映紅」に、

東都深川久永町といふ処は、正覚寺橋の川筋凡十町余り東にして猪の堀に隣り、ところ〴〵に材木間屋住宅し、……久永町とはいへど更に町形にはあらで、川添の蔵屋敷に似たり、既に川向に目立つ構は長さ二町余もあらん、万や和助とかやいえる材木間屋也、土地にては万和と呼て深川木場一ばんの身上一切の品手厚く仕入所持すとかや……

とある。敬順は、江戸近郊を巡り、その折々に見聞したことを記録している。文化十一年に初編を、それ以後、順次書き進み、文政十二年に五編を成す。右の記述は、文政（一八一八〜一八三〇）後期ころのものと推定できる。万屋和助は、その当時「深川木場一ばんの身上」という世間の評価を得ていたことが判明する。

次に、先にあげた鵬外『寿阿弥の手紙』に、「万屋和助なんぞも、維新前の金持の番附には幕の内に這入つてゐました」とあったので、幕末ころの長者番付を調査した。その結果、弘化三年（一八四六）刊『新板大江戸持○長者鑑』（東都正源堂板、東京都立中央図書館特別文庫室蔵、図2）の西の前頭二十六枚目で「万屋和助」は掲載されていた。江戸全体でも、五十番目前後のランキングであり、木

場で万屋より上位は東の前頭二十四枚目の天満屋六兵衛だけである。弘化（一八四四～一八四八）期においても、木場でトップクラスの豪商と見なされているといえる。

さらに、嘉永七年（一八五四）五月、幕府が江戸中の富裕な商人に御用金を命じた際の記録―国立国会図書館蔵『用金上納帳』―に注目する。深川の材木商たちも、上は千五百両、下は五十両、それぞれ御用金を出している。

金千二百両	深川木場丁	万屋和助
金七百両	同所平野丁	水戸屋次郎左衛門
金五百両	同所木場丁	柳屋庄兵衛
金三百両	同所島田丁	鹿嶋屋清吉
金千五百両	同所島田丁	鹿嶋屋清左衛門
金千両	同所島田町	太田屋徳九郎
金五百両	同所三好町	遠州屋太右衛門

（以下略）

千両を超えての納金は、三名しかおらず、その中に万屋が含まれる。つまり、深川の代表格ということであろう。

右の三つの証拠を踏まえ、『歴世女装考』刊行を支えた万屋和助は、文政期から嘉永期にかけて、江戸における著名な材木問屋であったといつてよい。

山東京山と万屋和助

三 東條琴台宛京山書簡―版元のトラブル―

『手紙雑誌』を読み進めていく中で、第八卷二・三合同号掲載の京山書簡が気になった。その書簡は、幕府から咎めを受けた国学者の東條琴台を慰める内容だが、その中でたまたま『歴世女装考』刊行に言及している。

……老拙年齢御尋に付申上候。当年八十四歳、一事もなし得たる事なく、むなしく犬馬の齢いとお愧しく奉存候。……拙作歴世女装考の義御尋被下候所、公許相済、すはらや伊八へ投じ置候。然るに若主人放蕩にて水戸の出店に謫せられ、其外種々混雑の事にて上梓遅滞いたし候へども、当年は開板に取掛るよしに候……

嘉永五子年閏二月七日の燈下

琴台先生

右の書簡から、嘉永五年（一八五二）の時点で、『歴世女装考』刊行に関して、まったく京山に責任のない、版元のトラブルがあったことがわかるが、その後の記述が等閑視できない。もし、弘化四年（一八四七）に初版が出来ていて刊行していたならば、刊記部分に手直しする程度で、後刷をすれば済むであろう。この時点で、「当年は開板に取掛る」と言っているのを、いったいどう考えればよい

のだろうか。

確かに、安政二年（一八五五）版『歴世女装考』には、須原屋が版元の一人に名を連ねている。つまり、弘化四年には刊行できず、延び延びとなり、それに須原屋のトラブルも加わり、結局、安政二年にやっと初版が刊行されたと考えるべきであろう。これまで弘化四年版が発見できなかった理由は、このように推定すれば、腑に落ちる。

そして『歴世女装考』の後編が刊行できなかった理由も連動して推定可能となる。前編の初版が弘化四年に出ていたとなると、なぜそれ以降、京山が他界する間の、十一年間に出版されなかったのかと疑問に思う。京山は、嘉永二年に『庭訓朝顔物語』シリーズを始めているなど活動が確認できることから、右の疑問が深まる。だが、『歴世女装考』前編の初版刊行が安政二年にまでずれ込んでいたとすれば、八十七歳になっていた京山に残された時間的余裕は、もはや三年しかなく、後編が刊行できなかったことは、不自然ではなくなる。

四 営利出版という壁

ここまでの検証によって、冒頭で提示した『歴世女装考』刊行に関わる謎は、ほぼ解明できた。

不明だった支援者は、深川木場で一、二を争った豪商万屋和助であり、前編の初版は安政二年刊行と推定でき、後編が未刊に終わった理由も初版刊行のずれ込みにその主な要因を求めることができる。しかし、

京山著作の広告において、繰り返し近刻とされながら、なかなか出版されなかった。

このことの説明について、火災の影響としただけでは、やはり十分であろう。

改めて、『歴世女装考』がどのような性質の書だったかを考えてい。同書は、営利出版には不向きだったのではないか、と思う。版元たちは、『歴世女装考』の出版を躊躇、もつとはつきりいえば嫌がったのではないか。

京山『歴世女装考』は、丁寧な考証を行っており、客観的に評価すれば、良書といえるのではなからうか。しかし利潤を求める立場の版元の眼で見れば、丁寧な考証を行っているために、編集に手間がかかり、断続的に修正変更の必要も出てきてしまい、しかも、女性の風俗などを扱う以上、適切な画証を正確に提示することが不可欠となる。すなわち、編集・刊行には、手間と時間が避けられず、費用がかさむことは覚悟しなければならない。

さらに、版元としては、費用とともに、経営判断上、重視するこ

とがある。それは、もちろん売れ行きである。『歴世女装考』は、丁寧な考証を行っており、その内容を草稿で確認すれば、価値があると判断し、おそらく刊行すれば、ある程度は売れると思ったかもしれない。しかし、売れ行きに関する不安は、なかなか払拭できなかったのではないか。

ここで、文政十二年（一八二九）十月十九日付の京山書簡（『山東京山書簡集』（『鈴木牧之全集』中央公論社、一九八三年刊））を示す。鈴木牧之に宛てたもので、雪国の風俗を考証し説明した『北越雪譜』に関する内容を含んでいる。

……さておもへらく北越雪談といたし、絵人よみ本五冊として、雪の故事、古歌なりと考を加へ、出版いたさんと存付候は亡兄の趣向にて候へども、よみ本にては手重く相成、雑費も余程かかり、作もむつかしく候故、つい／＼延引いたし候事に候。當時草双子のなりゆきを考るに、よき時節と存候間、

北越雪談を、

越後国雪物語全八冊

越後塩沢 秋月庵牧之作

東都 山東京山校合

歌川国貞画

右之通草双紙にいたし出版仕候はゞ、うれ可申かと存候。御冬こもりの内、御著述被成候はゞいかゞに御座候や。右に付貴君

山東京山と万屋和助

より御雑費等一切相掛け申間敷候。

つまり、『北越雪譜』に関して、手間・時間・費用、そして売れ行きを考え、草双紙（ここでは合巻のこと）にしてはどうか、と勧めている。この記述からすれば、考証では、内容的に優れていても売れ行きが不安だ、ということであろう。これは、京山『歴世女装考』にも当てはまる問題である。

五 豪商と出版

近世後期、出版業は大いに発展している。一見、書籍の刊行が容易になつてゐるのではないかと、想像してしまうが、事はそれ程単純ではなく、仮に良書であつても、営利出版の枠組みの中で、手間・時間・費用・売れ行きが計算され、刊行が敬遠されてしまう場合もあつたと思われる。『歴世女装考』刊行に紆余曲折が生じた理由の一つに、営利出版の壁の存在を想定すべきであろう。

『歴世女装考』が、この壁を乗り越えるために、正しく万屋和助の支援を必要としたのではないか。豪商の関与によつて、良書が世に出たことになる。

従来、作者・作品に注意が集中しがちである。しかし、その周辺の状況にも一層の関心を払つても良いのではないか。

浮世絵の分野で、大久保純一氏『浮世絵出版論』（吉川弘文館、

二〇一三年）「3 錦絵出版とスポンサー」が、

……幕末期に好事家の出資により生み出された錦絵が相当の点数に上るといふ可能性は、錦絵は出版資本である版元の企画のもとで生み出される営利商品であるといふ原則的な理解とは別に、幕末期における錦絵出版の複雑な背景を考えさせる材料ともなるだろう。

として、営利目的を追及した場合には出版しづらかったはずの豪華版の浮世絵が、幕末に登場した事例を明らかにしている。注目すべき指摘である。

また、「国語と国文学」二〇一四年五月特集号「近世後期の文学と芸能」には、拙稿「山東京伝と川喜田夏蔭——化粧品広告の作者と注文主——」・早川由美氏「十九世紀伊勢商人の文芸活動——長井五鈴と川喜田石水の出版活動から——」も載る。今後も、川喜田家に関連して、新たな資料の発見が期待される。それらの発見によって、従来の認識を改める必要も出てこよう。

近世後期、豪商が出版にどう関わったのかは、これまで以上に注意を払うべきではないだろうか。

〔付記〕 資料の閲覧・掲載を許可いただいた国立国会図書館・西尾市岩瀬文庫・東京都立中央図書館に対し感謝いたします。